

親の期待と子どもの受けとめ方

——子どもの将来への意欲と自己否定感に与える影響——

武田 真梨子 (東京大学教育学部)

◆ 要約

- ◎子どもが親からの期待に応えたいと思っていれば、親の期待は子どもの将来への意欲の上昇と自己否定感の緩和につながる。
- ◎子どもが親からの期待に応えたいと思っていない場合は、親の期待は子どもの将来への意欲の上昇や自己否定感の緩和につながらない。
- ◎また、子どもの期待に応えたいという意識は、親子で娯楽を楽しむ、親が経験談を子どもに話すといった、良好な親子関係によって高まる。
- ◎親の期待を一方向的な影響力として扱うのは不十分であり、今後は子どもの意識の違いに着目してより精緻な分析を行っていく必要がある。

1 問題設定

本稿の目的は、子どもが親の期待をどう受けとめるかによって、親の期待が子どもの将来への意欲と自己否定感に与える影響が異なることを明らかにするとともに、子どもの期待の受けとめ方を規定する要因を探ることである。

今回の調査対象である中学2年生は、程度の差こそあれ自分の進路や夢について考えたり悩み始めたりする時期である。この時期に子どもがどのような将来観を持ち、進路を描くようになるのかに影響を与える1つの要因として、最も身近な大人である親の存在が考えられる。先行研究により、子どもの目標設定に親からの期待や働きかけが影響していることが明らかになっている。

また、将来への意欲にとどまらず、子どもの自尊感情にも親からの期待や評価がかかわ

っていると考えられる。親から期待を受けることは、子どもの自尊感情を左右する（ただし、高める場合も低める場合もあり得る）だろう。近年問題になってきている日本の子どもたちの自尊感情の低さ、すなわち自己否定感の高さについて、親の期待という観点から分析することが可能である。

このように、一見異なる子どもの将来への意欲と自己否定感は、親からの期待の影響と密接にかかわっているという点で共通している。しかしながら、これまでの研究では、親の期待は一方向的に子どもに影響を与えるものとして扱われてきており、子どもの期待の受けとめ方に着目した研究は十分行われていたとは言えない。子どもが期待を原動力にするかプレッシャーにするかで期待の効果が大きく異なってくるだろうことは、容易に想像できる。そこで、本稿では子どもが期待をどう受けとめるかによって、将来への意欲と自

己否定感にどのような違いが出てくるのかを明らかにしたい。

2 先行研究の検討

卯月（2004）は、中学2年生までの子どもの努力（学習時間）は日常的な母親の働きかけに影響されており、大学進学希望という目標に関しては母親の進学期待が強い影響を持っていること、子どもの努力や大学進学希望は出身階層というよりも親の態度や意識の影響が大きいということを明らかにした。また、親子関係の良さと親の期待が子どもの目標に与える影響を分析した遠山（2006）によって、親の期待の高さ¹⁾が子どもの目標を高めること、中学生は親子関係が良いと期待に応えるような目標を持つが、親子関係が良くないと期待と無関係あるいはそれに背くような目標を持つことが示された。遠山は、親子関係が子どもの目標を高めることを示唆するこれまでの研究において、背後の親の期待の高さが十分に検討されてこなかったことを指摘した。そして、子どもが親子関係を認知する過程についてさらに検討する必要性を述べている。

さらに、高校生の就労意識に関する兵庫県の調査（21世紀ヒューマンケア研究機構家庭問題研究所 2005）によると、高校生は両親と進路についての話をする頻度が高いと、人の役に立ちたいという社会志向が強くなり、親が子どもを評価するほど、仕事をしたくないという非定職志向が弱まる。すなわち親との関係が子どもの長期的な将来観に影響を与えていることを示しており、中学生においても親が子どもの将来への意欲に影響を持っていることは十分に想定できる。これらのことから、子どもが将来に対して持つ目標や考え方が期待の認知によってどのように変わるのかを分析する価値は、十分にありとてよいだろう。

また、母親の養育態度と中学生の自尊感情の関連性を明らかにした稲葉・戸田（1999）をはじめとして、親の養育態度と子どもの自

尊感情についての研究はいくつか存在する。王（1984）は、親の受容的態度と中学生の肯定的な自己概念、また親の拒否的態度と中学生の否定的な自己概念には関連があるとしている。このことから、親から受ける期待と子どもの自尊感情、すなわち自己否定感においても何らかの関係があると考えられる。しかし、自己否定感に親の期待が一概にプラスやマイナスの影響を与えているとは考えにくい。子どもの期待の受けとめ方の違いに着目したうえで、親の期待がどのようにはたらいているのかを分析する必要があるだろう。

3 仮説

本稿においては、「親の期待」と「将来への意欲」をそれぞれ次のように定義する。まず親の期待だが、これは母親の期待に限定することにする。これまでの先行研究から母親と父親の影響力は異なった結果が示されているうえに、集計の結果、母親票と父親票は約9対1となったため、比率の異なる票を混同させてしまうことには問題があると判断した。父親票を除いても分析に耐えうるサンプル数であろう。また母親が子どもにかけている様々な期待のうち、地位達成的期待（高い地位や名誉を得てほしいという期待）を今回の指標に用いることにする。つづいて子どもの将来への意欲だが、これは将来志向（現在より将来を重視する時間選好）であるかどうか、進路目標が高い（短大・大学まで進学する意欲がある）かどうかで判断することにする。

- 理論仮説1：親が期待するほど子どもの将来への意欲は高まる。
- 作業仮説1-1：親の地位達成的期待スコアが高いほど、子どもは将来志向になる。
- 作業仮説1-2：親の地位達成的期待スコアが高いほど、子どもの進路目標は高まる。
- 理論仮説2：親の期待と子どもの自己否定

感には関連があるとは言えない。

- 作業仮説2：親の地位達成的期待スコアと子どもが自分をダメな人間だと思うかどうかには関連があるとは言えない。

- 理論仮説3：親が期待するほど子どもは期待に前向きになる。

- 作業仮説3：親の地位達成的期待スコアが高いほど、子どもは親の期待に応えたいと思う。

- 理論仮説4：期待に前向きな子どもにおいては、親の期待が高いほど将来への意欲は高いが、期待に前向きでない子どもにおいては、親の期待と子どもの将来への意欲に関連があるとは言えない。

- 作業仮説4-1：期待に応えたい子どもにおいては、親の地位達成的期待が高いほど将来志向になるが、期待に応えたいと思わない子どもにおいては、親の地位達成的期待と子どもの将来志向に関連があるとは言えない。

- 作業仮説4-2：期待に応えたい子どもにおいては、親の地位達成的期待が高いほど子どもの進路目標は高いが、期待に応えたいと思わない子どもにおいては、親の地位達成的期待と子どもの進路目標に関連があるとは言えない。

- 理論仮説5：期待に前向きな子どもにおいては、親が期待するほど自己否定感は低いが、期待に前向きでない子どもにおいては、親の期待と子どもの自己否定感に関連があるとは言えない。

- 作業仮説5：期待に応えたいと思う子どもにおいては、親の地位達成的期待が高いほど自分はダメな人間だとは思わないが、期待に応えたいと思わない子どもにおいては、親の地位達成的期待と自分がダメな人間だと思うことに関連があるとは言えない。

- 理論仮説6：親子関係が良好であるほど子

どもの期待への前向きさは上昇する。

- 作業仮説6-1：親が子どもとスポーツや趣味などを一緒に楽しむほど子どもは親の期待に応えたいと思う。

- 作業仮説6-2：親が子どもに自分の経験談を話すほど子どもは親の期待に応えたいと思う。

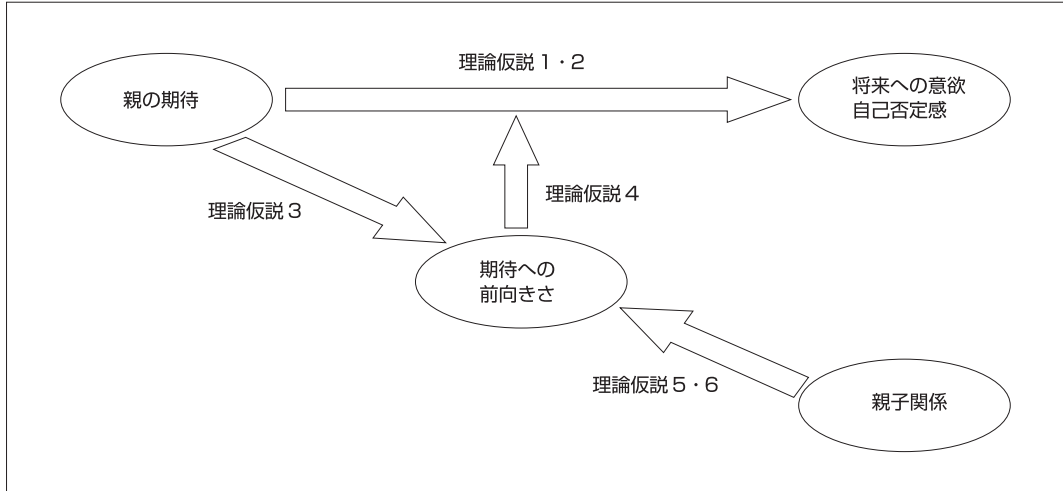
理論仮説1では、親の期待を受けることによって子どもの将来への意欲が上昇するかどうかを確認する。卯月（2004）によって、母親からの期待や働きかけが子どもの大学進学希望に影響を与えていることが明らかになっており、親の期待が高ければ将来志向や進路目標が上昇すると予測する。

理論仮説2は、親の期待が子どもの自己否定感に一概には影響を与えていないことを確かめるものである。子どもが自己否定感を持つか持たないかは、親の期待を一方的に受けることだけでは測ることはできないのではないかと考えた。子どもが期待を追い風にするか向かい風にするかで、自尊感情への影響も異なってくると考えられ、これについては理論仮説5で詳しく見ていくことにする。

理論仮説3では、親の期待が子どもの期待に応えたい意識を上昇させているかどうかを明らかにする。期待に応えたいと思うには、単純に親からの期待を受けていることが影響していると考えられる。

つづいて理論仮説4では、子どもの期待の受けとめ方によって親の期待が子どもの将来への意欲に異なる影響を与えるかどうかを検証する。遠山（2006）は親子関係の良好さによって親の期待と子どもの目標の関係が異なることを示したが、子どもが親の期待をどのようにとらえているのかは明らかになっていない。子どもの期待の認識によって親の期待の影響力がどう異なるのかは、検証する価値があると考えられる。期待に応えたいと思う子どもにとって、親からの期待は将来への意欲を高める追い風になるだろうが、期待に応えたいと思わない子どもにとって、親の期待は無

図1 分析モデル



関係なものか、あるいは重荷にさえなりうるだろう。

理論仮説5では、子どもの期待の受けとめ方によって親の期待が子どもの自己否定感に異なる影響を与えるかどうかを検証する。理論仮説4と同様に、期待に応えたいと思う子どもにとって、親から期待されることは自分が認められ肯定されるということであり、自己否定感は低下するだろう。逆に期待に応えたいと思わない子どもにとって、親からの期待は自己否定感をはじめとする種々の自尊感情と関連するとは考えにくい。

ここまでの仮説が支持されれば、子どもが期待に応えたいと思うことが将来への意欲や自己否定感の緩和に重要な影響をもてることが検証される。そのため次の段階として、子どもの期待への前向きさを規定する要因を探ることが必要になってくるだろう。理論仮説6では、子どもの期待の前向きさが親子関係の良好さによって高まることを検証する。具体的には、行動コミュニケーションとして親子が娯楽を一緒に楽しむこと、会話コミュニケーションとして親が自分の経験談を子どもに話すことが、子どもの期待への前向きさを高めるのではないだろうか。前者に関しては、親子が共通の趣味やスポーツを通して時

間を共有することによって、両者の意思の疎通がはかられ、親の期待を子どもが受け入れるようになると考えられる。後者に関しては、親から経験談を聞くことで親の価値観や考え方を知り、それを通して親が自分に期待する根拠を感じることで、親の期待を子どもが受け入れるようになると考えられる。

なお、理論仮説6については、クロス集計で2つの作業仮説を検証した後に、より精緻な分析を行うため、期待への前向きさを従属変数にしたロジスティック回帰分析を行う。そうすることで、子どもの期待への前向きさを規定している真の要因に接近することができるだろう。分析モデルを図1に示す。

4 変数の設定

- ① **母親の地位達成的期待**……HQ10C「将来は社会的な地位や名誉のある人間になってほしい」、HQ10D「世の中の競争に勝ち残ってほしい」を合成してなるべく均等になるよう3分割し、高いほうからそれぞれ上位、中位、下位とした。アルファ係数は0.721で、合成に耐えうる値であると判断した。
- ② **時間選好**……Q49の二択質問で「将来のためには、今やりたいことをがまんできる」

を将来志向、「将来のことはとにかく、今が楽しければよい」を現在志向とした。

- ③進路目標……中学卒業後の進路をたずねる Q40で「中学校を卒業したあと、就職や家業の手伝いをする」「高校を卒業したあと、就職や家業の手伝いをする」「高校を卒業したあと、専門学校や職業訓練校に進学する」を「短大・大学未満」、「高校を卒業したあと、短期大学（短大）に進学する」「高校を卒業したあと、大学に進学する」を「短大・大学以上」と2分類に設定した。
- ④自己否定感……Q47D「自分はダメな人間だと思う」を用い、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「高い」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「低い」の2分類に設定した。
- ⑤期待への前向きさ……Q46A「保護者からの期待には応えたい」を用い、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「期待に応えたい」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「期待に応えたいと思わない」の2分類に設定した。
- ⑥娯楽を一緒に楽しむ……HQ16E「子どもとスポーツや趣味などを一緒に楽しむ」を用い、「よくある」「ときどきある」を「ある」、「あまりない」「まったくない」を「ない」の2分類に設定した。
- ⑦経験談を話す……HQ16F「子どもに自分が経験したことを話す」を用い、⑥と同様に「ある」「ない」の2分類にした。

なお、ロジスティック回帰分析を行うにあたり、変数を用意する必要がある。独立変数は、子どもの属性として女子ダミー、文化階層上位ダミー²⁾、経済階層上位ダミー³⁾を、さらに⑥、⑦の2分類を用いて娯楽ダミーと経験談ダミーを設定する。地位達成的期待は①の合成変数をそのまま連続変数として用いる。従属変数は、⑤の2分類から期待に応えたいダミー変数を設定する。

5 分析

表1は母親の期待と子どもの将来志向をクロス集計したものである。母親の期待が高いほど将来志向の割合が増えており、作業仮説1-1「親の地位達成的期待スコアが高いほど、子どもは将来志向になる」は支持された⁴⁾。また、表2は母親の期待と子どもの卒業後進路のクロス集計で、こちらも母親の期待が高いほど短大・大学まで進学意欲のある子どもが増えており、作業仮説1-2「親の地位達成的期待スコアが高いほど、子どもの進路目標は高まる」は支持されたと言える⁵⁾。

作業仮説2「親の地位達成的期待スコアと子どもが自分をダメな人間だと思うかどうかには関連があるとは言えない」を検証したのが表3である。割合的には期待が高いほど自己否定感が低くなっているが、カイ2乗検定では有意とは言えず、仮説は支持された。少なくとも、すべての中学生を一括して見た場合には、親の期待は子どもの自己否定感の緩

表1 母親の地位達成的期待×時間選好

| 母親の地位 達成的期待 | 時間選好 | | 合計 | N |
|----------------|------|------|-------|--------|
| | 将来志向 | 現在志向 | | |
| 上位 (%) | 49.8 | 50.2 | 100.0 | (628) |
| 中位 (%) | 43.9 | 56.1 | 100.0 | (576) |
| 下位 (%) | 43.7 | 56.3 | 100.0 | (908) |
| 合計 (%) | 45.6 | 54.4 | 100.0 | (2112) |

ガンマ係数：0.079 5%水準で有意 p=0.039

表2 母親の地位達成的期待×進路目標

| 母親の地位 達成的期待 | 進路目標 | | 合計 | N |
|------------------------------|-------------|---------|-------|--------|
| | HQ10C・D×Q40 | | | |
| | 短大・大学未満 | 短大・大学以上 | | |
| 上位 (%) | 35.9 | 64.1 | 100.0 | (557) |
| 中位 (%) | 37.4 | 62.6 | 100.0 | (494) |
| 下位 (%) | 44.9 | 55.1 | 100.0 | (787) |
| 合計 (%) | 40.2 | 59.8 | 100.0 | (1838) |
| ガンマ係数：-0.136 1%水準で有意 p=0.002 | | | | |

表3 母親の地位達成的期待×自己否定感

| 母親の地位 達成的期待 | 自己否定感 | | 合計 | N |
|---------------------------|--------------|------|-------|--------|
| | HQ10C・D×Q47D | | | |
| | 高い | 低い | | |
| 上位 (%) | 50.6 | 49.4 | 100.0 | (624) |
| 中位 (%) | 53.9 | 46.1 | 100.0 | (575) |
| 下位 (%) | 54.4 | 45.6 | 100.0 | (912) |
| 合計 (%) | 53.2 | 46.8 | 100.0 | (2111) |
| ガンマ係数：0.049 有意差なし p=0.321 | | | | |

表4 母親の地位達成的期待×期待への前向きさ

| 母親の地位 達成的期待 | 期待への前向きさ | | 合計 | N |
|-----------------------------|--------------|--------------|-------|--------|
| | HQ10C・D×Q46A | | | |
| | 期待に応えたい | 期待に応えたいと思わない | | |
| 上位 (%) | 75.6 | 24.4 | 100.0 | (634) |
| 中位 (%) | 74.9 | 25.1 | 100.0 | (577) |
| 下位 (%) | 70.0 | 30.0 | 100.0 | (914) |
| 合計 (%) | 73.0 | 27.0 | 100.0 | (2125) |
| ガンマ係数：0.104 5%水準で有意 p=0.027 | | | | |

和には明確には影響していないとすることができる。

作業仮説3「親の地位達成的期待スコアが高いほど、子どもは親の期待に応えたいと思う」を検証したのが表4である。親の期待が高いほど期待に応えたい子どもが増加している。したがって仮説3は支持された。ただしガンマ係数は0.104であり、関連はそれほど大きくない。すなわち、親の期待がそのまま子どもの期待への前向きさに影響するという

一方向的なものではなく、他の強い要因がある可能性を示唆している。

つづいて作業仮説4-1「期待に応えたい子どもにおいては、親の地位達成的期待が高いほど将来志向になるが、期待に応えたいと思わない子どもにおいては、親の地位達成的期待と子どもの将来志向に関連があるとは言えない」を検証したのが表5である。期待に応えたいと思う層では、10%水準であるが親の期待が高いほど将来志向が高まっている。

表5 期待への前向きさ×母親の地位達成的期待×時間選好

Q46A×HQ10C・D×Q49

| 期待への前向きさ | 母親の地位達成的期待 | 時間選好 | | 合計 | N |
|--------------|------------|------|------|--------------|------------------|
| | | 将来志向 | 現在志向 | | |
| 期待に応えたい | 上位 (%) | 53.8 | 46.2 | 100.0 | (472) |
| | 中位 (%) | 49.5 | 50.5 | 100.0 | (428) |
| | 下位 (%) | 46.8 | 53.2 | 100.0 | (630) |
| | 合計 (%) | 49.7 | 50.3 | 100.0 | (1530) |
| | | | | ガンマ係数：0.095 | 10%水準で有意 p=0.071 |
| 期待に応えたいと思わない | 上位 (%) | 37.9 | 62.1 | 100.0 | (153) |
| | 中位 (%) | 27.1 | 72.9 | 100.0 | (144) |
| | 下位 (%) | 36.0 | 64.0 | 100.0 | (272) |
| | 合計 (%) | 34.3 | 65.7 | 100.0 | (569) |
| | | | | ガンマ係数：-0.007 | 有意差なし p=0.102 |

表6 期待への前向きさ×母親の地位達成的期待×進路目標

Q46A×HQ10C・D×Q40

| 期待への前向きさ | 母親の地位達成的期待 | 進路目標 | | 合計 | N |
|--------------|------------|---------|---------|--------------|-----------------|
| | | 短大・大学未満 | 短大・大学以上 | | |
| 期待に応えたい | 上位 (%) | 33.5 | 66.5 | 100.0 | (427) |
| | 中位 (%) | 36.5 | 63.5 | 100.0 | (378) |
| | 下位 (%) | 43.7 | 56.3 | 100.0 | (561) |
| | 合計 (%) | 38.5 | 61.5 | 100.0 | (1366) |
| | | | | ガンマ係数：-0.153 | 1%水準で有意 p=0.003 |
| 期待に応えたいと思わない | 上位 (%) | 43.7 | 56.3 | 100.0 | (126) |
| | 中位 (%) | 39.3 | 60.7 | 100.0 | (112) |
| | 下位 (%) | 47.9 | 52.1 | 100.0 | (217) |
| | 合計 (%) | 44.6 | 55.4 | 100.0 | (455) |
| | | | | ガンマ係数：-0.082 | 有意差なし p=0.317 |

しかし期待に応えたいと思わない層に着目すると、親の期待の高低と子どもの将来志向に有意な関連は見出せない。全体的に期待に応えたいと思わない層は現在志向の割合が高いが、特に期待中位層が強い現在志向を示している。これについての解釈は難しいが、期待が強すぎもせず弱すぎもしない中途半端な状態で「将来のために我慢する」という意識が低くなっている可能性が考えられる。以上より作業仮説4-1は支持された。

また作業仮説4-2「期待に応えたい子どもにおいては、親の地位達成的期待が高いほど子どもの進路目標は高いが、期待に応えたいと思わない子どもにおいては、親の地位達成的期待と子どもの進路目標に関連があるとは言えない」を検証したのが表6である。期待に応えたいと思う層では、親の期待が高いほど短大・大学までの進路目標を持つ子どもの割合が増加していることがわかる。しかし期待に応えたいと思わない層では、親の期待の高低と子どもの進路目標には有意な関連は見出せない。割合で見ると、母親期待中位では短大・大学以上が増加している。その理由として、期待に応えたいと思わないにもかかわらず親からの期待が強い子どもは、期待に反発するような目標を持ち、親からの期待も

表7 期待への前向きさ×母親の地位達成的期待×自己否定感

Q46A×HQ10C・D×Q47D

| 期待への前向きさ | 母親の地位達成的期待 | 自己否定感 | | 合計 | N |
|--------------|------------|--------------|------|-----------------|--------|
| | | 高い | 低い | | |
| 期待に応えたい | 上位 (%) | 48.2 | 51.8 | 100.0 | (473) |
| | 中位 (%) | 53.4 | 46.6 | 100.0 | (429) |
| | 下位 (%) | 55.7 | 44.3 | 100.0 | (637) |
| | 合計 (%) | 52.8 | 47.2 | 100.0 | (1539) |
| | | ガンマ係数：-0.102 | | 5%水準で有意 p=0.044 | |
| 期待に応えたいと思わない | 上位 (%) | 58.0 | 42.0 | 100.0 | (150) |
| | 中位 (%) | 55.2 | 44.8 | 100.0 | (145) |
| | 下位 (%) | 51.5 | 48.5 | 100.0 | (272) |
| | 合計 (%) | 54.1 | 45.9 | 100.0 | (567) |
| | | ガンマ係数：0.094 | | 有意差なし p=0.418 | |

表8 娯楽を一緒に楽しむ×期待への前向きさ

HQ16E×Q46A

| 娯楽を一緒に楽しむ | 期待への前向きさ | | 合計 | N |
|-----------|----------|--------------|-------|-------------------|
| | 期待に応えたい | 期待に応えたいと思わない | | |
| ある (%) | 75.4 | 24.6 | 100.0 | (1490) |
| ない (%) | 67.7 | 32.3 | 100.0 | (650) |
| 合計 (%) | 73.1 | 26.9 | 100.0 | (2140) |
| | | ガンマ係数：0.189 | | 0.1%水準で有意 p=0.000 |

低く自身も期待に応えたいと思わない子どもは、そもそも高い目標を持たないが、期待をそれなりに受けている子どもは、自分の力量と照らし合わせて自分の意志として進学を希望することが考えられる。以上より作業仮説4-2は支持された。

作業仮説5「期待に応えたいと思う子どもにおいては、親の地位達成的期待が高いほど自分はダメな人間だとは思わないが、期待に応えたいと思わない子どもにおいては、親の地位達成的期待と自分がダメな人間だと思うことに関連があるとは言えない」を検証したのが表7である。期待に応えたいと思う層では、親の期待が高いほど自己否定感は低くなっている。期待に応えたいと思わない層では、親の期待の高低と自己否定感には有意な関連

は見出せない。よって仮説は支持された。なお、有意な結果にはならなかったものの、期待に応えたいと思わない層では、むしろ親の期待が高いほど自己否定感が高まっている傾向が観察された。仮説2の結果を考慮すると、親の期待は全生徒を一括で見ると自己否定感を緩和しているとは言えないが、期待に応えたいと思う子どもには影響を与えているということである。

作業仮説6-1「親が子どもとスポーツや趣味などを一緒に楽しむほど子どもは親の期待に応えたいと思う」を検証したのが表8である。親子でスポーツや趣味を一緒に楽しんでいるほど、子どもの期待に応えたいという認識は上昇している。したがって作業仮説6-1は支持された。作業仮説6-2「親が子ども

表9 経験談を話す×期待への前向きさ

HQ16F×Q46A

| 経験談を話す | 期待への前向きさ | | 合計 | N |
|--------|----------|--------------|-------|--------|
| | 期待に応えたい | 期待に応えたいと思わない | | |
| ある (%) | 73.9 | 26.1 | 100.0 | (1947) |
| ない (%) | 64.6 | 35.4 | 100.0 | (195) |
| 合計 (%) | 73.1 | 26.9 | 100.0 | (2142) |

ガンマ係数：0.216 1%水準で有意 p=0.005

表10 子どもの期待への前向きさの規定要因（ロジスティック回帰分析）

| 独立変数 | 偏回帰係数 | オッズ比 |
|-----------------|---------|----------|
| 女子ダミー | 0.179 | 1.196 + |
| 文化階層上位ダミー | 0.202 | 1.224 * |
| 経済階層上位ダミー | 0.068 | 1.070 |
| 地位達成的期待（母親） | 0.122 | 1.129 ** |
| 娯楽ダミー（母親） | 0.323 | 1.381 ** |
| 経験談ダミー（母親） | 0.313 | 1.368 + |
| （定数） | -0.210 | 0.811 |
| Nagelkerke 決定係数 | 0.023 | |
| モデル適合度 | p=0.000 | |
| N | 2095 | |

注：+：p<0.10、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001。

もに自分の経験談を話すほど子どもは親の期待に応えたいと思う」を検証したのが表9である。親が経験談を子どもに話しているほど、子どもの期待に応えたい認識は高まっており、作業仮説6-2は支持されたと言える。すなわち、親子の良好な関係が期待に応えたいという認識を高めていることがわかる。

表10は、子どもの期待に応えたいと思う認識を従属変数にしたロジスティック回帰分析の結果を示したものである。これを見ると娯楽ダミーは1%水準で、経験談ダミーは10%水準ではあるが有意になっており、性別や文化・経済階層、親の期待を統制したとしても、これらの親子の行動が子どもの期待に応えたいという認識を高めているということができ

6 結論

以上の分析から、子どもの将来への意欲の上昇には親からの期待が影響しているが、それは期待に応えたいと思う子どもにおいてのみあてはまるもので、期待に応えたいと思わない子どもに対してはあてはまらないことが明らかになった。また、期待に応えたいと思う子どもにおいては、親の期待は自己否定感を低めるが、期待に応えたいと思わない子どもにおいては、むしろ自己否定感を高めてしまう可能性がある。従来の研究では一方向的に扱われていた親の期待は、子どもの受けとめ方によって与える効果が異なるということが検証された。すなわち親の期待がどのように子どもに影響するのか、子どもの意識の違

いに着目してより精緻な分析を行う必要があるということである。さらに、子どもの期待の前向きさを高めるには、親子が娯楽を楽しんだり経験談を共有したりすることが効果的であることが示された。

今回、親子関係の良好さが子どもの期待への前向きさを規定することが明らかになった。しかし、この分析では扱えなかった問題が残されている。まず、親子の関係性をこれ以上細かに分析することができなかつたため、過干渉な親を持つ子どもがどのような意識を持っているのかを明らかにすることができなかつた。親からの過度な働きかけを受ける子ど

もが親からの期待をどのように受けとめるのかについては、今回の分析とは異なった結果が示される可能性がある。

また、本田（2008）が忠告するように、現代の母親は様々な社会的重圧のもとで懸命に子育てに奮闘しているのであり、今回の結果をもとに家庭教育の批判をするつもりはない。子どもに一方的に期待をかけていけばよいわけではなく、日頃から親子で時間を共有しておくことが期待に応えたいという思いを芽生えさせる土台となるのだということ、母親に限らず子育てに関係する保護者たちに気づいてもらえれば幸いである。

<注>

- 1) 遠山は、両親からどの程度期待されていると思うかを子どもにたずねることで、子どもの期待の認知を測定している。
- 2) Q31の蔵書数から文化階層ダミー変数を作成した。なるべく均等になるよう、「ほとんどない」「20冊くらい」「50冊くらい」を0、「100冊くらい」「200冊くらい」「300冊くらい」「400冊以上」を1とした。
- 3) Q30の所有財スコアを用い、なるべく均等になるよう、1～4点を0、5～8点を1とする経済階層ダミー変数を作成した。
- 4) 文化階層ならびに経済階層と親の期待との間に有意な関連は見られなかつた。親の期待の大きさは家庭階層によって規定されているとは言えない。
- 5) 男子は5%水準で有意になったが、女子には有意な関連は見られなかつた。ガンマ係数はそれぞれ-0.165と-0.072である。女子の場合、親からの期待に関係なく、高学歴を望まない道念がいまだに存在しているのかもしれない。

<引用文献>

- 本田由紀、2008、『「家庭教育」の隘路——子育てに脅迫される母親たち』勁草書房。
- 稲葉珠樹・戸田須恵子、1999、「中学生の自己概念と母親の養育態度の関係について」『鉏路論集』31: 223-37。
- 21世紀ヒューマンケア研究機構家庭問題研究所、2005、『青少年の就労意識と家族に関する調査研究報告書』兵庫県。
- 王福順、1984、「中学生の自己概念と親の養育態度——日本と中華民国（台湾）の比較文化的研究」『名古屋大學教育學部紀要』31: 261-2。
- 遠山孝司、2006、「小・中学生の親子関係、親からの期待、子どもの目標の関係——親子関係がよいと子どもは親の期待に応えようとするのか」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』53: 37-55。
- 卯月由佳、2004、「小中学生の努力と目標——社会的選抜以前の親の影響力」本田由紀編『女性の就業と親子関係——母親たちの階層戦略』勁草書房、114-32。